

## ■第 15 回「哲学系読書会(仮)」

■日時：2021 年 11 月 25 日（火）18 時より 21 時半まで

■課題書：M・フーコー『言葉と物』新潮社（3 章と 4 章）

■参考文献：

■報告：山本（M）

■会場：北浜ワークスペース

### 第三章

#### 一 ドンキホーテ

##### ●ドン・キホーテと言語（p 71 上）

○「類似と記号（＝しるし）とのかつてのたわむれはここでおわりをつけ、そこではすでに新しい関係が結ばれている」。

○彼は常軌を逸した人間ではなく、相似のあらゆる標識のまえて足を止める巡礼（者）。

○「彼が自分の由来するテキストと確かに同じ性質のものであることを示すためには、どことなくしるしを自分自身や他人にあたえるべきなのか、それを知るために」書物（騎士物語）を参照する。騎士物語は彼のなすべき冒険を指定している。（挿話、決断、武勲は、彼が模倣した記号に、彼が実際に似たものであることを示すしるしでなければならない。）（騎士には従者と思慕する姫がいる。）

○だが、読まれるものとしての記号は、「もはや目に見える存在とは類似していない」。彼は自分がそれらの記号に似たものであることを立証しなければならない。

○彼は英雄譚をつくりなおす。本来、英雄譚（たん）は過去の現実の武勲を語るものだが、逆に彼は「物語の内容のない記号を現実によってみださなければならない」。彼の冒険は、「書物が真実を語っていることを示す形象を地表のあらゆるところで指摘する巡礼となる」。

○それは、現実を（言語の記号がたしかに物それ自体に合致するという）しるしに変えること、「書物を証明するために世界を読む」ことである。

##### ●相似関係の探索と魔術（p 72 下）

○わずかな類比も、まどろむ記号とみなして、再び語りはじめるように働きかける。家畜の群れ、女中、旅籠屋は、軍勢、貴婦人、城に少しでも似ていれば書物の言語になる。

○「この類似はつねに幻滅に終わる。求めていた証拠は物笑いの種になり、書物の言葉（パロール）は満たされないままである。」

○けれども、相似していないこと自体がそれなりのモデルを持つ。「そのモデルは、魔法使いによる変形である。」

○魔術はありうるものと見なされ、書物（彼が呼んだ書物）に記述されている以上、「それが導入するこの幻覚的相違は、結局のところ魔法にかけられた相似にほかなるまい。したがってそれは、書物の記号が確かに真実に類似していることを示す、補足的なしるしだと言えよう。」

○「書かれたものは、もはやそのまま世界の散文ではない。類似と記号の古い和合は解消した。相似は人をあざむき、幻覚や錯乱に変わっていく。」

○「記号のしたのひそかな相似関係をあきらかにすることによって世界の解読を可能にした魔術は、いまや正常な働きを失い、類似がなぜ人をあざむくかを説明することにしか役立たない」

○「自然と書物とをひとつづきのテキストとして解読した博識は、いまでは妄想として斥けられる。」

##### ●言語の新しい力（p 73 上）

- 「言語がまったく無力になったわけではない。以後、それはあらたな固有の力を帯びる。」
- この小説の第二部で彼は「その第一部を読んだ人物に出会い、その人物は現実の人間である彼を本の主人公として認知する」。
- 「セルバンテスのテクストは、それ自身のうえに折りかさなり、自らの厚みのうちにくいこみ、みずからにとってみずからの物語の対象となる」
- 第一部は、第二部において、「騎士道物語が引きうけていた役割を演じる」。
- ドン・キホーテは、(自分になってしまった)書物に忠実でなければならない。
- 「誤りや戯作やまちがった続編からこの書物を守りぬぎ、抜けていた細部を追加し、書物の真実性を維持しなければならない。」
- 第一部と第二部のあいだ(間隙)で、「書物のみの力によってドン・キホーテはみずからの現実に到達した。言語のみからきて、まったく言葉の内部にとどまっている現実に」。
- 近代の最初の作品(p74上)
- 「そこでは、同一性と相違性との残酷な理性が記号と相似とをはてしなく弄ぶのが見られる」
- 「類似が、みずからにとって非＝理性と空想のそれである、あらたな時代を迎える」
- 詩人と狂人(フーコーがこの本で狂人に触れるのはp74、p75のみ)(p74上)
- 「相似と記号の関係がひとたび解かれるや、二つの経験が成立し、二人の人物が向いあって登場することが可能となる。」
- 「公認され保護される逸脱として、文化の不可欠な機能として理解されてきた狂人が、西欧の経験のなかで、常人ばなれのした類似を呼ぶ人間となる。」
- 「彼はあらゆるところに類似と類似を示すししか見ない。彼にとってあらゆるしるしはたがいに類似したものであり、あらゆる類似はしるしとしての価値をもつものである。」
- 文化の空間のもう一方の端、その対称性によってきわめて近いところに詩人がいる。
- 詩人は、「名指され日常的に予見された相違のしたに、物相互の隠された近親関係、散乱した相似関係をふたたび発見する」。
- 「おそらくこのようにして、近代西欧文化における詩と狂気の対峙がもたらされたのである。」
- 「そしてその狂人と詩人のあいだに、いまやひとつの知の空間が開かれた。そこでは、西欧世界における本質的な断絶によって、もはや相似ではなく同一性と差異が問題になるであろう。」

## 二 秩序

- 不連続性(p75上)
- 「歴史一般にとって、不連続性のあり方を決定するのは容易ではない」
- 「一般的にいて、ひとつの思考をもはや思考しえないとはどのようなことであろうか？そして新たに思考を創始するとはどのようなことであるのか？」
- 「いかにして思考は、世界の空間の中に場所を占め、そこにいわば起源ともいえるものを持ち、そこでつねに新たにはじめられることをやめないのか？けれども、この問題を提起するのはおそらくまだ早すぎるだろう。」
- 「だからさしあたっては(思考の考古学が確実なものとなるまでは)、これらの不連続性を、それらのあたらえている明白と同時に曖昧な、経験的次元において受け入れることとしよう。」
- デカルトとベーコン(p76上)
- 十七世紀初頭、バロックと呼ばれる時代に、「思考は類似関係の領域で活動するのをやめる」

- 「相似はもはや知の形式ではなく、むしろ錯誤の機会であり、混同の生じる不明な地域の検討を怠るとき人が身をさらす危険なのだ。」
- 「デカルトは『精神指導の規則』の冒頭で、《人々の習慣として、二つの物のあいだに類似を認めるたびに、両者の実際上の相違点に関してさえ、一方について真なるを確かめた事柄を両者いずれについても主張するのである》と語っている。」
- 「十六世紀の知は、世界のあらゆる物が経験や伝承や軽信によってでたらめに結ばれあうことのできた、雑然たる無秩序な認識の、歪んだ思い出を残すのにほかならない」
- 「ベーコンにはすでに、類似にたいする批判が見いださされる。それは経験的な批判であって、物同士の秩序関係や相等関係に関するものではなく、…錯覚に関するものである」
- 「デカルト（1596-1650）の批判は、（ベーコンとは）別のタイプのものである。」
- 「知の基本的経験かつ本源的形態としての類似をしりぞけ、類似のうちに、同一性と相違性、軽量と秩序の用語で分析すべき雑然たる混合物を摘発する。」
- 比較を「普遍化し、そうすることをつうじて、それに最も純粋な形態をあたえようとする」。
- すべての認識は《二つあるいはそれ以上の物の相互の比較によって得られる》と言ってさしつかえない。」（デカルト）
- 《人間理性のはたらきはほとんどすべて、この比較という操作を可能にするところにある（デカルト）》
- 比較の形態（p 78上）
- 「比較には二つの形態があり、また二つしかない。すなわち、計量的比較と秩序の比較である。」
- 「二つの量あるいは数を比較するには、両者の分析に際して何らかの共通の単位を適用しなければならない。…計量による比較は、すべての場合に、相等性と不等性という算術的關係に帰着する。」
- 「計量は、相似者を同一性と相違性という計算可能な形式にしたがって分析することを可能にするのだ。」
- 秩序は「外部にある単位に依拠することなく設定される」。《AとBとの間に存する秩序が何であるかを、これら両端の項のほか何も考えずに認識する》（デカルト）
- 「もっとも単純なものを発見し、ついでそれにもっとも近いものを発見するというふうにして、そこからもっとも複雑な物にまでかならず達することができれば、すべての物の秩序を認めることができるわけだ。…比較することと秩序づけることは同一のことにほかならない。」
- 「第一項他のすべてから独立して直観される性質のものであり、他の項は相違性の増大する順序にしたがって配列された、いくつもの系列が設定されるわけである。」
- 普遍化された比較（p 78下）
- 「ところで、量と数の計量は、秩序の設定に帰着させることができる」
- 「算術的な値は、つねにある系列にしたがって秩序づけることができる」
- 「さまざまの単位は、《計量的認識に属していた困難が、ついにはただ秩序のみの考察に支配されるような秩序にしたがって、配列》（デカルト）されうるのである。」
- 方法：「すべての計量を、単純なものから出発してさまざまな相違を複雑性の段階としてあらわす、ひとつの系列に帰着させること。」
- 類似者は、単位と相等・不等の關係とにしたがって分析されたのち、明白な同一性と相違性とにしたがって分析される。そしてその《相違性》とは、《推論》の秩序のなかで思考されたものである。
- この秩序、普遍化された比較は、「認識における連鎖關係にもとづいてはじめて成立する」
- 「ひとつの物が、ある点から見れば絶対的であっても、他の点から見ると相対的なことがあるう」
- 「秩序とは、必然的かつ自然的（思考との關係で）であると同時に、恣意的（物との關係で）なものでも

ありうるのだ。」

○「長いこと知の基本的範疇」(認識の形式であるとともに内容)だった類似者が、「同一性と相違性の用語でおこなわれる分析によって分離」された。

○「比較は秩序と関係づけられることになった」

○「比較は、思考の秩序にしたがっておこなわれ、単純なものから複雑なものへと赴くのだ。」(世界がいかに秩序づけられているかをあきらかにする役割を演ずるのではない)

●知そのものを変質させる変様 (p 80上)

1. 分析が類比的な階層構造に変わったこと (相似関係の変容)

2. 完全な列挙が可能になったこと

3. 確実な認識が可能になったこと

4. 精神の活動 (認識すること) が、識別することになったこと

○「認識することは識別することであるがゆえに、物語と学問とはたがいに分離されるだろう」

○「われわれが、《プラトンやアリストテレスの議論をすべて読んだとて、…われわれが学ぶのは学問ではなく物語であろう》(デカルト)」

○「語はそれが可能な場合に真理を表現することはできても、もはや真理の標識となる権利をもたない。言語は存在の場から退き、透明と中性の時代にはいっていく。」(これこそ十七世紀文化の一般的現象、デカルト哲学のみのことではない)

●三つのものの区別 (p 81上)

1. 機械論：医学や生理学などの知に領域に理論的モデルを提供

2. 経験的对象への数学化の努力

(物理学の一部と天文学にとっては恒常的で連続的) 他の領域では、散発的なものにとどまり、ときには現実にこころみられ、普遍的理想あるいは地平として提起され、その可能性自体について忌避された。

3. 計量と秩序に関する普遍的学問として理解された《マテシス》との関係

○機械論や数学化の努力と、古典主義時代の知全体が維持していた《マテシス》との関係を混同してはならない (思想史家は、三つのものを混ぜ合わせてしまう)。逆に、他の人々は「数学にも運動の物理学にも還元されない自然と生命とが、合理化されえぬの資源を古典主義の基底に維持していたというのだ。」(どちらも不十分)

○「古典主義時代の《エピステーメー》にとって基本的なものは、機械論の成功や失敗、自然を数学化する権利や不可能性ではなく、十八世紀末まで恒常的で損なわれることなくつづく、《マテシス》との関係だからだ。」

●マテシスとの関係の二つの特徴 (p 82上)

1. 「諸存在相互の関係は秩序と計量の形態のもとに思考されるが、その際、計量の問題をつねに秩序の問題に帰着せしめるという、…基本的不均衡が付随する」「したがって、あらゆる認識と《マテシス》との関係は、計量不能の物同士のあいだにさえ、秩序ある継起関係を設定する可能性としてあたえられる。この意味において、《分析》はすみやかに普遍的方法としての価値をもつ」(質的な諸領域の数学を定立しようとするライプニッツの投企は、古典主義時代の思考の核心)

2. 「他方において、秩序に関する一般的学問としての《マテシス》とのこうした関係は、知が数学に吸収されることも、可能なかぎりのあらゆる認識が数学に基礎をおくことも意味しない。それどころか、…これまで形成も規定もされなかつたいくつかの経験的領域の出現が見られるのだ。それらの領域は、いずれも秩序に関するひとつの可能な学問を下地として成立している」(機械論や数学化の痕跡はない。その道具は《代

数的方法》ではなく、《記号の体系》である)

○こうして、語と諸存在と必要の領域における秩序の学があらわれた。(一般文法、博物学、富の分析) これらは、《エピステーメ》全体が秩序に関する普遍的学問との間に維持した関係なしには、成立しえなかった。

### ●記号と秩序 (p 82下)

記号学と解釈学を重ねあわせていた解釈が、十六世紀の本質的な相似関係の認識だったように、記号による秩序づけが、あらゆる経験的な知を同一性と相違性の知として成立させる。

### ●類似関係の世界の分解 (p 83上)

○一方には、「分析の道具となった記号、すなわち同一性と相違性の標識、秩序づけの原理、分類学の鍵となった記号が見られる」。(記号と分割と配分との一般的理論がある)

○もう一方には、「かすかにつぶやきつづける物同士の経験的類似、思考のしたで分割と配分に無限の材料を提供するあの鈍くひびく相似がある」(直接的類似、想像力の自然発生的運動、自然の反復性の問題がある)

○「この隔たりのうちにみずからの空間を見出す新たな知が生まれる」

### 三 記号の表象作用 (p 83上)

○十七世紀全般に変化し、今日まで続いてきたもの

記号の体制全体、記号が機能をはたす際の条件

おびただしいもののなかから記号を突然記号として立たしめるもの、記号の存在そのもの

○記号は世界の一形象であることをやめた。

(類似もしくは類縁関係の強固な秘密の紐帯でつながれたものではなくなった。)

### ●記号の三つの可変要素 (p 83下)

#### 1. 結合関係の起源

自然的なものか、約束によるものか (鏡のなかの反映が実物を指示する、あるいは、ある語がある集団にとってある観念を意味する)

#### 2. 結合のタイプ

それが指示する総体に属するか、切り離されているか (健康の一部である良い顔色が、健康を示す) (旧約聖書の象徴が、キリストの化肉と贖罪を遠くから示す)

#### 3. 結合関係の確実性

忠実さを確信できるほど恒常的である場合か、単に蓋然的である場合か

(例 呼吸が生命を指示する) (青白い顔色と妊娠との関係)

「これらの結合関係は、いずれも相似関係を含むものではない。」(自然的記号すら相似を求めない)「叫びは恐怖の自然発生的記号だが、恐怖に似ているわけではない」

○「この三つの可変要素が、類似関係にかわって経験的認識領域における記号の有効性を規定する」

#### 一。記号の確実性と蓋然性 (p 84上)

○記号は、「認識の内部にみずからの空間をみいださなければならなかった」

(「つねに確実もしくは蓋然的なものであるから)」

#### ・十六世紀

記号は、「実在するために認識される必要はなかった」。物のうえに置かれていると考えられていた(「物の秘密や本姓や美質を人間が発見できるよう」)。

記号を基礎付けていたのは、「認識ではなく物そのものの言語」だった。

・十七世紀

「記号の全領域は確実なものと蓋然的なものに配分される。」

「未知の記号や無言の標識はもはやありえぬこととなる」

「すでに《認識》された二つの要素のあいだに置換関係の可能性が認識された瞬間から、はじめて記号があらわれる」

「認識という行為をへずにはけっして記号として成立しない」

●占ト（せんぼく）と記号の網（p84下）

・占トは、「みずから先だつ記号をつねに前提にしていた」

そのつとめは「神によって世界のうちにあらかじめ配分された言語を拾いあげること」（神的なものを見抜くこと）

・今では、「記号が記号としてはたらき（シニフィエ）はじめるのは認識の内部」であり、「記号はその確実性や蓋然性を認識から借りうける」

○記号を認識自体の空間に閉じ込めた認識が、（逆向きの運動によって）蓋然性にたいして開かれる。

○「ひとつの印象の他の印象にたいする関係」は、「記号と記号によって示されるものとの関係」（継起関係）のように、小さな蓋然性から大きな確実性へと展開していく関係となる。

○「古い絶対的な記号を（いきあたりばつりに）見抜いていた認識は、蓋然的なものの認識によって一歩一歩と築かれる記号の網によってとってかわられる。」

二、記号とそれが記号である（シニフィエ）ところのものとの結合関係の形態（p85上）

○十六世紀の相似は、空間と時間にたいして勝利していた。（「記号は、物を引きよせ結びつける機能をもっていた」から。収斂（しゅうれん）的記号の円環状の世界）

○古典主義：「記号は逆に本質的な分散性によって特徴づけられる」（無限の展開）

●記号、分析、拡散（p87下）

○記号は、「要素としてそれが指示するものの一部をなす」か、「そのものから現実には切り離されている」かである。（だが二者択一は完全ではない）

○「機能するためには、記号はそれが記号である（シニフィエ）ところのものに挿入されていると同時に、それから区別されていなければならない」

○「記号の成立は、分析と不可分」、「記号は分析の結果である」

○「記号はひとたび規定され分離されると新たな印象にも適応される。」（新たな印象にたいして格子の役割を演じる）

○「精神が分析を行うがゆえに記号があらわれ、精神が記号を手に行っているがゆえに分析は再現なく続く」

○古典主義時代の記号は、「世界をくりひろげ、それを際限もなく開かれた表面にそって並列化し、世界を思考するのに用いられる代替物の果てしない展開を世界を出発点として追及する」役割を担う。

○「世界が分析と結合の対象となり、端から端まで秩序づけうるものとなる」

三、記号の自然性あるいは約束事としての性格（p86下）

（記号が自然によって与えられるか、人間によってつくられるかであることは、以前から知られていた。）

○十六世紀も「人間の諸言語のうちに人間の設けた記号を認めていた」が、「人為的記号は、自然的記号への忠実性によって力を維持していた」。（「自然的記号が他のすべての記号を遠くから基礎づけていた」）

○十七世紀以後、「自然と約束ごと（convention）に与えられた価値は逆転する。」

・「自然的なものとしての記号は、物から取りだされた一要素」にすぎない。

・融通のきかぬ、不便なものであり、「精神はそれを自由に使いこなすことができない。」

しかし、「約束ごとによる記号を設定する場合、」

・「いつでも、単純で、記憶しやすく、無数の要素に適應でき、それ自体分割と合成が可能ないように選ぶことができる」

・こうした記号こそが「人間と動物を区別し、想像力を意思的な記憶に、自然発生的注意力を反省に、本能を理性的認識に変える」

#### ●恣意的なものの機能と新しい言語（p87上）

恣意的なものの機能は正確に規定される

○記号の恣意的体系は、「物をもっとも単純な要素に分解すること」を許し、「起源(origine)にまで分解を押しすすめ、「それらの要素の組みあわせがいかに可能か」を示す「物の複雑性の発生過程を観念のうえで理解させる」ものでなければならない。

○「《恣意性》は、記号が設定された際の仕方を指示しようとするときのみ、《自然性》と対立する」

○恣意的なものは、「分析の格子と結合の空間」でもある。それらをとおして、自然は、「起源にある印象に密着したレベルで、しかも「それらの印象の組みあわせのあらゆる可能な形態において」「みずからがそうあるところの姿を示す」。

○記号の体系とは（その完成されたかたちにおいて）

「要素的なものの命名を可能にする単純で絶対的に透明な言語」であると同時に「すべての可能な連結を規定する操作の総体にほかならない。」

○「起源のこうした探究と連合 groupment の仕方のこのような計算 calcul」？とは、われわれには両立しがたいものと映る。

○古典主義時代をつらぬく必然的な唯一の配置

「普遍的計算と要素的なものの探求とが、ひとつの人為的体系の内部で相互依存の関係におかれることである。」

○「この体系は、（人為的であるがゆえに）起源となる諸要素からそれらすべての可能な組みあわせの同時性にいたるまで、自然の姿をあらわしうる」。

○記号を用いることは、以前のように「永遠に語られ語りなおされる言説の原初的テキストを記号のしたに再発見しようところみる」ことではない。「自然を自らの空間のなかで展開させることを可能にする恣意的言語、自然の分析における最終的な項、そして自然の合成法則を、発見しようつとめることである。

○知は、「古い言葉を…未知の場所から掘りおこす」のではなく、言語を作りださねばならない。その言語は、「分析と組み合わせをおこなう、まことの計算言語である。」

#### ●記号の体系、タブロー、普遍的言語（p88上）

○記号の体系は、認識のうちに「蓋然性、分析と結合、体系の正当化された恣意性を導入する」。「起源の探究と計算可能性、可能な合成物を定める表(タブロー)の成立ともっとも単純な要素からの発生過程の復元」を同時にもたらす。「すべての知を一個の言語に近づけ、既存のすべての言語に、人為的記号と論理的性格の操作との体系をおきかえようとする」

○十七世紀初頭の「記号と類似の分離」が、蓋然性、分析、結合、体系、普遍的言語などの新しい形象を、「互いに他を生みだしたり斥けたりする継起的テーマとしてではなく、必然性の単一な網目として出現させた」。(ホッブス、バークリー、ヒューム等は、この網目が可能にした)

#### 四、二重化された形象（p88下）

○古典主義時代の記号は、記号の蓋然性の度合いや記号とシニフィエ（所記＝内容）との隔たりがまちまちであり、自然的でも恣意的でも記号の性格や価値に影響がない。そのことは、「記号とその内容との関係が物それ自体の秩序のなかで確立されていないことをよく示している。」（いかなる中間的形象も能記と所記との出会いを保証しない）

（能記と所記の関係は）「認識の内部において、《ある物の観念》と《他の物の観念》との間に設けられた紐帯にほかならない」

●三元的体系から二元的体系へ（p 89上）

○『ポールロワイヤル論理学』は、「記号の本性は、前者（表象する物の観念）によって後者（表象される物の観念）を喚起する点にある」と明言する。「これは、記号の二元的理論」。

○ルネッサンスの記号の理論は、「標識によって示されるもの、標識となるもの、後者のうちに前者の標識を認知することを可能にするものという、完全に区別された三つの要素を含意していた。」（最後の要素が類似性）「記号は、それが指示するものと《ほとんど同一の物》であるかぎりにおいて標識としての機能をはたしていた」。「この統一的な三次元体系」は、《類似による思考》と同時に消滅した。

●二元的な記号の条件

○能記（シニフィアン）となる要素は、「他の観念に連合もしくは置換された観念、心象、あるいは知覚という単純な存在においては、まだ記号ではない。」

○能記となる要素が記号となるのは、「それ（能記）とそれ（能記）が記号であるところのもの（シニフィエ＝内容）との関係を、（さらにこの）要素（能記）が顕示するという条件においてのみである。」（能記は何かを表象していなければならないが、さらにこの表象作用が能記のうちに表象されていることが必要）

○『ポールロワイヤル論理学』によれば、「ある対象を、他の対象を表象するものとして見る場合、人がそれについていく観念は記号（シーニュ）の観念であり、この第一の対象は記号と呼ばれる。」

●能記（シニフィアン）の二重化（p 89下）

○「他のものとのかわりをつとめる観念」のうえに、「その観念の表象能力の観念が重なりあっている」。「所記となる観念、能記となる観念、そして後者の内部にその表象機能の観念という、三つの観念がある」のではないか。

○（それは三元的体系への回帰ではない）「それはむしろ、二項からなるこの形象 figure のもつ避けがたいずれ、「この形象が（それ自体よりうしろへ引いて）能記となる要素の内部に完全に宿るにいたったと言うべきであろう。」

○能記（シニフィアン）は、「それが表象しているもの以外、いっさいの内容、機能、決定因をもたない」。「（それ表象しているもの）のために整えられており、そのものに対して完全に透明である」。「その内容は、みずからを表象として示す表象のうちにしか示され」ない。

○所記は、「記号の表象作用の内部に残余も不透明さもなく宿っている」。

○ポール＝ロワイヤルによれば、「絵は実際それが表象しているもの以外の内容をもたず、それでいてその内容が、ひとつの表象によって表象された状態でしかあらわれない」。

○十七世紀の記号の二元的配置は、ストア学派、ギリシャの文法家以来の三元的組織にかわる。「この配置は、記号が二重化されそれ自体のうえに重ねられた表象であることを前提としている。」

○「ある観念が他の観念の記号となりうるのは、両者のあいだに表象関係が設定されうるばかりではなく、この表象作用が、表象するほうの観念の内部につねに表象されうるからである。」「表象作用はそれ自身にたいして垂直であり、《指示》であると同時に《自己顕示》、他の対象との関係であると同時に自己の顕示だからである。」



○「古典主義時代以降、記号とは、《表象可能な》ものとしての表象作用のもつ《表象性》となる」。

●重大な帰結（p90上）

●第一 「古典主義時代における記号の重要性」

○「記号はかつて、認識の手段、知を得るための鍵であった」。「その記号がいまや表象作用—すなわち思考のすべて—と同一の広がりもち、(表象作用のうちに宿っているとはいえ、)それを全体として踏破するものとなった」。

○「ある表象が他の表象に結びつけられ、それ自身のうちにこの結びつきを表象するやいなや、そこに記号が生じる。」(「抽象的観念は、それが形成されるもととなった具体的知覚の記号である(コンディヤック)。」等)

○「表象作用の分析と記号の理論とは、互いに完全に浸透しあっている。」

●第二 「表象作用の場における記号のこうした普遍的拡張は、意味作用(シニフィカシオン)の理論の可能性までも排除する」。(「もし、現象がつねに、表象のうちにしかあたえられぬとすれば、意味作用というものは問題となりえまい」。「それどころか、意味作用はあらわれさえしないはずだ。」)

○「すべての表象は、その透明性において、それが表象しているものの記号としてみずからを示す。」まさにそれゆえに「意識のいかなる特異な活動もけっして意味作用を成立させることはできない。」

○今日のわれわれ—「意味作用からしか記号というものを考えない」ので、「マルブランシュから観念学にいたる古典主義時代の哲学が徹頭徹尾記号の哲学であったことを承認するのが、その明白さにもかかわらず困難」である。

○「記号の外部に意味はなく、記号に先立って意味はない」

○「意味作用を成立させる行為も、意識の内部における発生過程もないのである」。「記号とその内容とのあいだに、いかなる中間的要素も不透明さもない」

○「記号は、その内容を支配しうる法則以外の法則をもたぬ」。「記号の分析は、そのまま、(まったく正当なものとして)記号の語ろうとするものの解釈(所記についての考察?)なのだ。」

○「逆に、所記(シニフィエ=内容)をあかすみに出すこと(所記の分析?)は、それを指し示す記号について考察すること以外の何ものでもない。」

○十六世紀同様、「記号学と解釈学とは重なりあっている。」しかし「重なり方は同じではない。」(類似という第三の要素のなかで接合されるのではない。)

「それ自体を表象するという表象固有の能力のなかで結ばれる。したがって、意味の分析とは別個の記号の理論はない。とはいえ、体系は、意味の分析よりも記号の理論の側に(、)ある種の特権を与える」

○「記号の理論が、記号にあたえるのとはべつの性格を記号によって示されるもの(エートル・シニフィエ)に賦与しない以上、意味とは、連鎖して展開する記号の全体でしかありえぬこととなる。意味は、記号の《タブロー》のうちにあたえられるはずなのだ。」

○「一方、記号のこの完全な網目は、意味の側に固有な截断にもとづいて結びつき分節化されている。記号の表は物の《模像》にほかならない。」

○「意味の存在(エートル)が完全に記号の側にあるとしても、機能は完全に所記(シニフィエ=意味される内容)の側にあるわけだ。」

○言語の分析は、言語記号の抽象的理論から出発し一般文法の形をとるが、「つねに語の意味を導きの糸」とする。

○博物学は、「生物の特徴の分析という性格」を示すが、分類法は「自然の秩序に合致するか」、「可能な限りそれを解体しまい」と企てる。

○富の分析は、「貨幣と交換とを出発点としながら、価値がつねに必要なによって基礎づけられる」。

○「古典主義時代においては、純粋に記号を対象とする学問が、そのまま所記についての直接的言説として価値を持つ」

●第三 「十七世紀以来、記号に関するすべての一般的学問を基礎づけてきた記号の二元的理論が、表象の一般的理論と根本的関係によって結ばれていること」(p92上)

○「記号が能記と所記との純然たる結びつきであるならば、(恣意的・そうでない場合、意図的・強課される場合、個人的・集団的なとき) いずれにしても、関係は表象の一般的な場の内部に設定されるほかない。」

○「両者がともに表象されている(あるいは表象されていた、もしくは表象されうる) 限りにおいて、しかも一方が現に他方を表象している限りにおいて」、能記と所記は結ばれている。

○「記号に関する古典主義時代の理論が、それを哲学的に基礎づけ正当化するものとして、何らかの《観念学》(感覚から抽象的な観念にいたるすべての表象形態の一般的分析) を持ったのは当然のことである。」

○ソシュールは、「記号について「心理主義的」とも見えかねぬ規定(概念と心像の結びつき) 与えた」。彼は、「古典主義時代において記号の二元的性格を思考するために必要だった条件を、この規定のうちに再発見した」。

## 五 類似性の想像力 (p92下)

○ルネッサンス時代に、世界にひしめきあう物のうえに分布していた記号は開放される。

○記号は、「表象作用の内部、観念の間隙、観念がみずからを分解し再合成してみずからとたわむれる」、「厚みのない空間に宿る」。

○相似は、「認識の領域の外に転落する」。それは、「もっとも粗雑な形態における経験的对象である」。

○(しかし)「十六世紀におけると同様、類似は記号と宿命的に呼びあっている。けれども、それは新たな様態においてなのだ」。

○《属そのものや種やあらゆる抽象概念が、類似という手段なしで形成されるかどうか言ってほしい(ヒューム)》

## ●二重の逆転 (p93下)

「記号、そして記号とともに言説的認識全体が、いまや相似という背景を要求する」

かつては「認識に先だつ内容を顕在化」した。いまや「認識の諸形態に適用の場を提供しうるような内容を提示」する。

○「古典主義時代において、類似は、認識されるべきもの、認識それ自体からもっとも離れたものが姿をあらわす際の、もっとも単純な形態にほかならない」。

○「表象が認識されうるのは、すなわち、相似であるかもしれないものと比較され、要素(他の表象と共通な要素)に分析され、部分的同一性を呈示しうる他の表象と組みあわせられ、最後に秩序ある表のかたちに配分されうるのは、いずれも相似なのだ」。

○分析の科学の時代の相似は、批判的思考の時代の「多様なるもの」が演じる役割と対照的な役割をする。

## ●二重の必要条件 (p94上)

○(それなしには認識がありえない条件としての) 類似は、「想像力の側に位置している」。

○類似は「想像力の力によってしか」あらわれない。

○想像力は、「類似をささえとすることなくしては作用しない」。

○「表象のなかに、過去の印象をふたたび現前させる晦冥(かいめい=暗闇)な力がひそんでいなければ、いかなる印象も、先行する印象に似たものとして、もしくは似ていないものとして、あらわれることはない」

であろう。」(p94下)

○「この想起する力は」現在のものと以前に実在することをやめたもの、二つの印象を「隣接的で同時的なものとして、ほとんど同じ仕方で実在するものとして」出現させる。

○「想像力なしには、物同士のあいだに類似はないはずなのだ。」

○二重の条件(どちらも他方を「免れることはできない」)

・「表象される物のなかには、類似の執拗なつづやきがなければならない」

・「表象作用のなかには、想像力のつねに可能な重ねあわせがなければならない」

●分析の二つの方向性(p94下)(二つの条件は古典主義時代全体を通じて続く)

「しだいに両者は接近して、十八世紀後半の〈観念学〉のなかに共通の真実を発見する」

《第一の系列：無意識的基盤全体の分析》

・印象、無意識的想起、想像力、記憶など、時間のなかにおける心像の力学

「表象の線状の時間を潜在的要素の同時的空間に変形する積極的能力としての《想像力》の分析論に照応」

《第二の系列：物の類似を説明する分析》

・秩序づけられ、同一の要素と異なる要素へ分解され、表(タブロー)のかたちに配分される以前に、物がもっていた類似についての分析

「物の本質的秩序が混乱しているにもかかわらず」、その秩序が記憶にとって、「類似関係、漠然とした相似、暗示的機会の形で透視されるほど目につきやすいのはなぜかを問題にする」。

「諸存在の表を混乱させ、それを漠然とした遠い類似をもつ表象の列というかたちに散乱させる、そうした空隙(くうげき)や無秩序をともなう《自然》の分析に照応」

●二つの契機の統一としての《発生論》(p95上)

「対立するこれら二つの契機 moments は、《発生過程》という概念のうちに統一を見いだす」

・「印象における自然の無秩序という消極的契機」

・「印象からの秩序の再構成という積極的契機」

○二種類の統一の仕方

第一：消極的契機(無秩序の契機等)は想像力自体のせいになされる。

・想像力は二重の機能をはたすものと見なされる

想像力を、「誤謬(ごびゅう)の場であると同時に数学的真理にさえ到達する能力として分析」(デカルト、マルブランシュ、スピノザ)、そして「人間性の有限性の烙印を認めた」

第二：想像力の積極的契機を、混濁した類似や、相似の曖昧なつづやきのせいにする

・自然は、多様性のゆえに、きわめて混乱した様相を呈しており、「表象行為にたいしてたがいに類似した物しか提供できない」。「したがって表象行為は、たがいに近接した内容につねに束縛される」。

・表象行為は、「みずからを繰り返す、みずからを想起し、ひとりでにそれ自体のうえに折りかさなり、ほとんど同一の印象を再生せしめ、かくて想像力を生起させる」

・コンディヤックとヒュームが類似と想像力との紐帯を認めたのは、「自然がいっさいの秩序に先だって自己に類似するという謎めいた事実のうちになのだ」。

○二つの解決法は、正反対なものだが、同一の問題に答えている。

○第二のタイプの分析が「最初の人間(ルソー)、目ざめてゆく意識(コンディヤック)、他の世界からこの世界に落ちてきた観察者(ヒューム)といった神話的形態で展開されやすいことは理解されるだろう」。

●「自然」と「人間の本性」という概念(p96上)

○「この二つの概念は、想像力と類似との相互依存、両者をたがいに結び付ける紐帯を、保証するものとし

て機能している。)(その重要性は、自然という豊かな力が、経験的探求の場として発見されたからではない。人間の本性という独異な小分野が分離されたからでもない)

○想像力はみたところ人間の本性の一特性にすぎず、類似は自然の示すひとつの姿にすぎないが、考古学的網目からは以下のことが見てとれる。

・「人間の本性が、表象にみずからを再一現前させる re-presenter ことを可能にらしめる、表象のあのわずかにはみ出た部分に宿っていること」(表象が自己を再び現前させるにちょうど充分なだけ表象の外部に、表象の現前とその反復の「再び re-」とをへだてる空白のなかに、)

・「自然とは表象の不可解な混乱にほかならず、その混乱ゆえに、同一性による秩序が目に見えるものとなる前に類似が感知されるようになること」

・自然 nature と人間の本性 nature とは、「類似と想像力との調整を可能ならしめ、このことによって、秩序に関するすべての経験的学問は基礎づけられ可能とされる。」

○十六世紀、類似は記号の体系と結びつき、「記号を解釈することが具体的認識の場を開いた。」

○十七世紀、類似は「知のもっとも低く賤しい辺境へ追いやられる。」そして類似は、「想像力、ふたしかな反復、模糊とした類比に結びつく。」「類似は、(解釈の学のきっかけとなるかわりに、)〈同一者〉の示すあれらの摩滅した形態から、同一性と相違性と秩序との形態にしたがって展開する知の表(タブロー)へとさかのぼる、ひとつの発生過程を含意する。」

○十七世紀に基礎をおく秩序の学は、ロックから〈観念学〉にいたるまで、「認識の発生論によって裏打ちされることを含意していた。」

## 六 「マテシス」と「タクシノミア」(p97上)

### ●古典主義時代の経験性の空間

○「秩序に関する一般的な学問、表象を分析する記号の理論、同一性と相違性との秩序ある表への配分」(ルネッサンスにはなく、十九世紀初頭には消滅する)

○古典主義時代のエピステーメー全体を可能にしているのは、それ(エピステーメー?)と「秩序の認識との関係である。」

○単純な自然を秩序づける：「〈代数学〉を普遍的方法とする《マテシス》に訴える。」

○複雑な自然(経験においてあたえられるような表象一般)を秩序づける：「《タクシノミア》を成立させる必要」がある。そのためには「記号の体系を設定しなければならない。」

○「思考がそれ自身で設定する記号は、いわば複雑な表象の代数学ともいうべきものを成立」させる。「逆に代数学は、単純な自然に記号をあたえ、それらにもとづく操作を行う方法なのである。」

### ●計算と発生論に縁どられたタブロー (p97下)

○「《タクシノミア》は、さらに、物のある種の連続体(存在の非=不連続または充満)と、存在しないものを出現させながら、まさにそれによって連続体を明るみに出すことを可能にする、想像力のある種の能力とを前提にしている。」

○「経験的秩序に関する学問の可能性」は、認識についての分析を必要とする。「存在の隠された連続性(そしていわば混乱したかたちであらわれている連続性)が、不連続な表象の時間のなかでの結びつきをつうじて、いかにして再構成されうるかを示す分析」である。

○「認識の起源を考察することの必要性」が、古典主義時代を通じて明瞭な形であられる。

○「計算可能な秩序の学としての《マテシス》と、経験的なものの列から出発していかにして秩序が成立するかを分析する《発生論》とが、古典主義時代の《エピステーメー》の両端に位置することとなる。」

- 「同一性と相違性にたいする可能な操作をあらゆる人為的記号が用いられ、他方では、物の類似と想像力の遡行とによってしだいに蓄積された標識が、分析の対象となる。」
- 「《マテシス》と《発生論》の間に、記号の分野が広がっている。」（経験的全域を貫通するが、そこからあふれでることはない）それは《表＝タブロー》の空間である。
- この知においては、「知覚、思考、欲望など、われわれの表象行為がわれわれに提供しうるすべてのものにたいして、それぞれ記号をあたえることが問題となる」。
- 「記号は、特徴としての価値をもつもの」でなければならない。（「表象の総体を、明瞭に区別され、指定しうる特質によってたがいに分離された、いくつかの領界に分節化するものでなければならない」）
- 「こうして記号は、表象相互の遠近と親疎を表す同時的体系の設定を可能にする。」（「時間継起の問題をはなれて表象相互の近縁関係をあきらかにし、それらの秩序関係を永続的な空間において復元する網目」を設定する）
- 《博物学》「自然の連続性と錯綜状態と分節化する特徴の学」  
 《貨幣と価値の理論》「交換を可能にし人間のさまざまな必要や欲望の間に等価関係を設定せしめる記号の学」  
 《一般文法》「人間が個別的知覚を分類し思考の連続的運動を截断するために用いる記号についての学」
- （相違にもかかわらず、）「三つの領域が古典主義時代に実在したのは、相等性の計算と表象の発生論の間に、表の基本的空間が創設されたからにほかならない」
- 《マテシス》と《タクシノミア》の機能（P99上）
- 《マテシス》、《タクシノミア》、《発生論》という三つの概念が、「古典主義時代における知の一般的布置を規定する緊密な相互依存の網目を指示する」。
- 厳密には、「《マテシス》は、相等性の学、主辞＝属辞関係定立と判断の学」である。「《タクシノミア》は、同一性と相違性を扱うものであり、分節化と分類階級の学、《諸存在》に関する知」である。「発生論は、《タクシノミア》の内部に宿り」、「そこに本源的可能性を見出す」。
- 《タクシノミア》は、「統辞法として、記号をその空間的同時性において扱い」、発生論は、「時間継起の記述として、記号を時間の類似物のなかに配分する」。
- 「《タクシノミア》は、《マテシス》との関係においては命題学にたいする存在論として機能し、発生論にたいしては歴史との対比における記号学として機能する。」
- 「《タクシノミア》は、諸存在の一般的法則を規定し、同時に諸存在の認識が可能であるための諸条件を規定する。」
- 古典主義時代の記号の理論は、「自然そのものの認識と称する独断的様相をおびた学問」と「時とともにしだいに唯名論的・懐疑論的になっていく表象の哲学」とを「同時に担いえた」のは、このこと（タクシノミアの機能）に由来する。また、この配置が、「後代がその実在の記憶まで失うほど消滅したという事実」もそこに由来する。
- 「カントの批判哲学、そして十八世紀に西欧文化に起こったすべての出来事のあとで、新たなタイプの分割が創始された」。
- 古典主義時代の《エピステーメー》は、「そのもっとも一般的な配置において、《マテシス》、《タクシノミア》、《発生的論分析》の分節的体系として定義できる」。
- すべての学問は、（遠いものにせよ、）「つねに網羅的秩序づけの企てをいんでいる。」
  - 学問は、「つねに、単一な諸要素とそれらの漸次的合成過程の発見をめざしている。」
  - その中間地帯において、学問は、「表、すなわち、認識をそれ自身と同時的な体系として展開したものな

のだ。」

○十七世紀と十八世紀において、知の中心は表（タブロー）。

●古典主義時代の知そのものの考古学的分析（p 100上）

○考古学的分析を企てようとするならば、その実定的な網目が、共存する一見矛盾したさまざまな諸説のたわむれを可能にしている、思考の一般的体系を再構成すべきなのだ。」

○（神の存在の証拠となるほど自然が秩序づけられているかなどについて）西欧世界が論争をくりひろげたのは、「記号が類似との際限ない円環を消散させたのち、因果性と歴史との諸系列を組織するのに先だって、表のかたちをしたひとつの空間を開き、この空間のなかを、秩序の計算可能な形態からもっとも複雑な表象の分析にいたるまで、たえず往復しつづけたからだ。」

○古典主義時代の知の体系は、「認識の可視的諸形態が、この体系のうちにおのずから相互の近縁関係を素描するほど拘束力を持つ」。「方法、概念、分析のタイプ、獲得された経験、人々の精神、そして結局のところ人間それ自体さえもが、知の暗黙の（不可避的な統一性を規定する）基本的な網目のままに転位したかのようなのだ。」

○転位についての無数の実例

- ・認識の理論と記号の理論と表象の理論とのあいだの数多くの往復
- ・表象や記号の分析と富の分析のあいだの往復
- ・自然物の分類の理論と言語の理論との間の往復

○「経験的な知、すなわち、量的でない秩序の知の大きな網目が、いわば点線によって描かれていった。」

○「知の極限は、すべての表象がそれらを秩序づける記号にたいして完全に透明になることなのだ。」？

#### 第四章 語ること

一 批評と注釈（p 102上）

●古典主義時代の言語と思考

○古典主義時代の「言語の実在は、至上であると同時に、目立たない」。

○「語が、《思考を表象する》任務と能力をあたえられた」。

○「言語は、思考がみずからを表象するように思考を表象する。」

○「古典主義時代には、表象にあたえられないものは何ひとつとしてあたえられぬ。」そのことによって、「自己とのあいだに距離をおき、みずからを二重化し、自己の等価物である他の表象のうちにみずからを反映させる表象のはたらきによらなければ、いかなる記号も出現せず、いかなる言葉も言表されず、いかなる語も命題もけっしてどのような内容も目指しはしないのである。」

○表象は「みずからの力で表象固有の空間にむかって開かれており、この空間内部の脈網が意味を生じさせる」。

○「言語は、表象が自己とのあいだに設けるこの偏差のうちにある。」

○言語は、「思考の縦りだす横糸」のなかに織りこまれている。「思考の外的な結果ではなく、思考それ自体にほかならない。」

●透明になる言語（p 103上）

○「言語が表象にたいしてまったく透明になったため、言語の存在は問題となくなる。」

○「ルネッサンス時代は、言語がそこにあるという生のままの事実の前で足をとめた。」

○「十七世紀以後欠落するのは、このずっしりとした、そして人を当惑させずにはおかぬ、言語の実在にほかならない。」

○「言語はもはや表象以外に場をもたず、表象のなかでしか、すなわち表象がしつらえる力をもつあの空洞のなかでしか、価値をもたないのだ。」

#### ●言説の任務（p103下）

○「十六世紀の言語は、自己にたいして、たえざる註釈という立場をとっていた。…この註釈は、何らかの言語がそこにある—何らかの言語が、それを語らせようとして用いられる言語に先だって沈黙のうちに実在する—という条件ではじめておこなわれるものにほかならない。」

○「古典主義時代以後、言語は、表象の内部、表彰のなかに空洞を設ける表象それ自体の二重化のうちに展開される。」

○「表象だけが残り、それを顕現する言語記号のなかにくりひろげられ、そのことによって《言説（ディスクール）》となるのである。二次的言語によって解釈されるべき言葉（パロール）の謎に、まだ中性的で特徴のない開いたままの可能性にすぎず、それを現実化し固定するのが言説（ディスクール）の任務である、「表象の本質的言説性がおきかえられたわけだ。」

○（ある）言説がべつの言語の対象となる場合、この言説が何かを「それとわずに語っている」あるいは「それ自身に限られた言語や閉じた言葉」であるかのように問いかけない。

○「人々はただ、この言説にたいして、それがいかに機能しているか、つまり、それがいかなる表象を指示しているか、いかなる要素を截断し取りあげているのか、いかにして分析と合成をおこなっているのか、いかなる置換の仕組みによって自らの表象的役割を確保しているかを問うだけである。」

○「《註釈》が《批評》に席をゆずったのだ。」

#### ●批評の役割と形態（p104上）

○「一見したところ、批評は、可視的形態の分析が隠された内容の発見に対立するように註釈に対応する。しかし、この形態が表象のそれである以上、批評は言語を、真実さ、正確さ、適切さ、あるいは表現的価値などの用語で分析せざるをえない。このことから、批評の複合的役割と…両義性とが生じる。」

○「批評は、言語に対して、それがあたかも純然たる機能、メカニズムの総体、記号の大きな自律的仕組みであるかのように問いかける。だが同時に、言語が真実であるか虚偽であるか、透明であるか不透明であるか、つまり、言語の語ろうとしているものがそれを表象するために用いられた語のなかにいかなる様態で現前しているかという問いを、言語に対して提起せざるをえない。」

○「内容と形式の対立がしだいにあきらか」となるのは、「二重の基本的性格の必然性を出発点としてなのだ。」この対立が「ぬきさしならぬもの」となるのは「十九世紀」にはいつてからである。

○古典主義時代において、批評は「分裂することなく」、「言語の表象的役割に対しておこなわれた。」批評は、互いに「接続」しつつ「区別」される四つの形態をとった。

1) 「反省的次元において、《語》の批評として展開される。」

・「在来の語彙によって学問や哲学を構築することの不可能性の指摘」

・「表象において区別されるものを混同する一般的用語、連帯関係にあるはずのものを切り離す抽象的用語との摘発」

・「完全に分析的な言語の宝庫を成立せしめる必要性の指摘 など」

2) 「文法的次元において、統辞法や語順や分構造のもつ表象的価値の分析としてあらわれる」

・「言語は曲用（名詞等の性・数・格などの違いによる変化）をもつ場合と前置詞の体系をもつ場合とどちらが完成化されたものであるのか？」 など

3) 「批評は、修辞学上の諸形式の検討のうちに自己の空間を見いだす。」

・「修辞上の《型》、つまり、言説の種々のタイプとそれぞれの表現的価値の分析」

- ・「譬喩（ひゆ）、つまり、表象上の同一内容にたいして種々の語がもちうる諸関係の分析」
- 4)「既存の書かれた言語にたいして、言語とそれが表象しているものとの関係を規定しようとする。」
- ・「十七世紀以来、宗教上の原点についての釈義が批評的方法を用いるようになった。」
- ・「言われていることを言い直すのではなく、「いかなる表現上の目的のために、またいかなる真実を伝えるためだったのか、それをあきらかにする。」

#### ●批評と註釈（p 105上）

- 「表象と真実性の用語で言語について語ることによって、批評は言語を審判し冒瀆する。」
- 「註釈は先在するテキストの「誕生の過程をみずからのうちで反復する」。」「註釈は言語を神聖化する。」
- 「言語が自己とのあいだに関係を設ける」二つの仕方は拮抗する。（それは今日まで続く）
- 十九世紀以来の批評的言語は、「古典主義時代の釈義が批評的方法をとりいれた」のに似て、「釈義の作業を引き受けている」。
- 「われわれの文化において、「あらゆる二次的言語は批評か註釈かの二者択一を迫られる」。」

## 二 一般文法

#### ●言説（p 106上）

- 言語の实在が欠落すると、「残るのは表象作用における言語のはたらき、すなわち「《言説》としての性格および効力だけとなる」。
- 「《言説》とは、言語記号によって表象された表象そのものにほかならない。」
- 他の記号より「よく表象を表示し分析し再構成すること」を可能にする不思議な力は何なのか？

#### ●言語の特質

- 言語を他の記号から区別し、言語に意味作用の決定的役割を演じさせるものは、「言語が表象を否応なく継起的順序（＝秩序 ordre）」にしたがって分析することからくる」。
- 「言語は思考全体を一挙に表象することができず、それを線状の順序に沿って部分ごとに配置せざるをえない。」
- 「この順序は、表象とは無縁のものである。…ひとつひとつの思考はある統一体を形成している。命題のうちに展開しなければならないのは、…みずからのうえに凝縮された諸表象にほかならない。」
- 「《思考は単一な操作である》のに、《言表することは継起的な操作》である。「ここに言語固有のもの」がある。」

- 言語は、「さまざまな部分（または量）の同時的比較にたいして、段階を逐次的に追わなければならないひとつの順序をおきかえるのだ」。それは、「空間における順序の根本的創設にほかならない。」

#### ●一般文法と呼ばれた「新たな認識論的領域」（p 107下）

- 「《一般文法》とは、《表象されるべき同時的なものとの関係における、言語上の順序の研究である》。一般文法の固有の対象は思考でも言語でもなく、言語記号の列として理解された《言説》なのだ。」
- 「代数学が表象に導入する…普遍的秩序（順序）から見れば、言語は、自然発生的、非反省的で、いわば自然的といえるのかもしれない。」
- 「言語は、それを考える観点によって、すでに分析を経た表象とも、自然状態にある反省ともいえるだろう。」
- それ（言語）は、「表象と反省とを結ぶ具体的紐帯である。」それは、「人間同士が意思を通じあうための道具であるよりも、表象が反省と通じあうためどうしても通らなければならぬ道なのだ。」（十八世紀の哲学にとっての重要性）



○（言語は、）学問の発生的形態、精神の未確認の論理ともいうべきもの（コンディヤック）」であり、「思考の最初の反省的分解であって、直接的なものとのもっとも原初的な断絶のひとつにほかならない。」

○言語は、「あらゆる反省の最初の形態、あらゆる批評の最初のテーマ」である。

○一般文法は、「認識とおなじひろがりをもちながらつねに表象の内部にある、この両義的なもの（言語）を対象とする。」

●（一般文法の）いくつかの帰結（p 108 下）

1）古典主義時代の「言語の学がいかに分割されているかがあきらかになる」

・「《型》と《譬喩（ひゆ）》一言語が言語記号のかたちで空間化される仕方—を扱う《修辞学》と「分節化と順序—表象の分析が継起的系列にしたがって配列される仕方—を扱う《文法》」がある。

2）「文法は、言語一般に関する反省として、言語と普遍性との関係を明らかにする。」

・この関係は、〈普遍的言語〉の可能性を考慮するか、〈普遍的言説〉の可能性を考慮するかにしたがって、二つの形態をとりうる。」

・（普遍的言語とは、）「おのおのの表象とそれを構成するおのおのの要素に、それらの一義的標識となりうる記号をあたえることができるような」言語なのである。この言語は、「一個の表象のなかで諸要素がどのように合成され、いかに結合しあっているかを示すことができるであろう。」（あらゆる秩序を遊覧できる）

・（普遍的言語は、）「考えうるかぎりのすべての秩序がそこにしかるべき場所を見出す」、そのような「記号、統辞法、文法をあらたにつくりだすものなのだ。」

・普遍的言説は、「もっとも単純な表象からもっとも精緻な分析やもっとも複雑な組みあわせにいたる、精神の自然で必然的な歩みを規定する可能性なのである。」

・「この言説は、知が、それ自身にみずからの起源を指定する唯一の順序のうちにおかれたものにほかならない。」

・「それは、認識の場全体をいわば地下において踏破し、そうすることをつうじて、表象を出発点とする認識の可能性を現出せしめ、認識の誕生をあきらかにし、認識相互の線状で普遍的な自然の紐帯を浮き彫りにする。」

・「あらゆる認識の基礎、連続的言説として顕示された認識のこうした起源」これこそが、〈観念学〉すなわち「認識の自然発生的脈絡をその全長においてなぞる言語である」。

◎百科辞典（p 110上）

○「〈普遍的特徴記述〉と〈論理学〉とは、言語一般（それは、あらゆる可能な秩序を唯一の基本的表の同時性のなかに記述する）の普遍性と、網羅的言説（それは、連鎖関係にある可能な認識のひとつひとつにたいして、唯一で有効な発生過程を展開する）の普遍性とが対立するように対立している。」

○「両者の企てと共通の可能性とは、古典主義時代が言語に貸しあたえたある種の能力のうちに宿っている」。

○それは、「いかなるものであれあらゆる表象に正確な記号をあたえ、表象相互のあいだに、可能なすべての結合関係を設定する能力にほかならない。」

○「言語があらゆる表象を表象しうるかぎりにおいて」、言語は「普遍的なものの宿る場所である」。

○「みずからのもつ語のあいだに世界全体を収用しうるような言語がすくなくとも可能なものとして存在しなればならず、逆にまた、表象されうるものの全体としての世界は、その総体において、一個の〈百科事典〉となることができなければならない。」

○多くの世界は、それぞれが書物。それを集めた〈宇宙〉という〈書庫〉=真の普遍的〈百科事典〉をかたちづくる（シャルル・ポネ）。

○「このような絶対的<百科事典>を基底として、人間たちは、合成され制限された普遍性の中間的諸形態を成立せしめる」

- ・可能なかぎり多数の知識を文字の恣意的秩序におさめるアルファベット順の<百科事典>。
- ・世界のすべての言語を同一の仕方で表記することを許す文字体系
- ・相当数の言語のあいだに同義関係を定立する対照辞典
- ・《人間の知識と秩序と連鎖を可能なかぎり明示》(ダランベール)しようとする合理的百科事典

○古典主義時代のエピステーメーにおいて、こうした企ての基礎をなすのは、「言語の存在が表象におけるそのはたらきに完全に帰着するとすれば、逆に表象は、言語の媒介によってのみ普遍的なものとの関係をもつ」という事実にほかならない。

3)「認識と言語とは厳密な意味で交錯する。」

○「両者は表象のうちに同一の起源と同一の機能原理をもち、互いにささえあい、補いあい、たえず批判しあう。」

○「語るにせよ認識するにせよ、精神の動きは同一である。」

○「けれども言語は、認識であるにしても非反省的な認識にすぎない。それは外部から個人に押しつけられ、好むと好まざるとにかかわらず個人を、…さまざまな概念のほうへと導いていく。」

○「これに対して認識は、それぞれの語が吟味され、それぞれの関係が確認された、一個の言語ともいうべきものである。」

○「知るとは、正しく語ること、精神の確実な動きが指定するとおりに語ることであり、語るとは、もちあわせの手段が許す範囲で知ること、生まれを同じくする人人から強課されたモデルにもとづいて知ることなのだ。」

○「言語が磨かれぬままの学問であるのとおなじ程度に、学問はよくできた言語である。だから、すべての言語はつくりなおさなければならない。」

○(言語は)「どれひとつとして正確にはしがっていない。」

○「分析的順序から出発して説明され判断されなければならない、さらに、認識の連鎖が陰影も欠落もなく明瞭にあらわれるように、調整しなおさなくてはならない。」

○「こうして文法は、その本性そのものによって規則的となる。」「語ることの根源的可能性を表象の順序付けに依拠せしめるからだ。」

#### ◎知と言語の相互依存

○「言語がそれ自身にとって晦冥(かいめい=暗闇)な、幼稚で自然発生的な学問であるとして—それは逆に認識によって改良されていくということにほかならない。認識がひとたび語のなかにおかれれば、それはそこに、みずからの痕跡と、認識内容がかつて宿った空虚な場所のようなものを残さずにはいないからだ。」

○「言語は、みずからの完成化の記憶を忠実にとどめている。言語は人を誤らせもするが、人の学んだことを記憶する。」

○文明や民族が思考の遺跡として残したのは、「テキストよりも語彙や統辞法、実際に発せられた言葉よりもむしろ言語を構成する音韻、言説よりも言説を可能ならしめるもの、すなわち、彼らの言語の言説性なのだ。」

○「ある国家の異なる時期における語彙を比較するだけで、その国家の進歩について概念を得ることができるだろう(ディドロ)」

○語は、「現実を粗雑に截断しながら、学問と知覚、反省と心象が接触する、あの境界線上に分布されている。」「語のなかで、心象は知識となり、逆に知識は日常的心象となる。」

○「ルネッサンス時代に博識を定義づけていた《テキスト》との関係」は、「言語の純粋な場との関係」となった。

◎認識することと語ること

○「ルネッサンス時代の知は」、「閉ざされた空間のなかに配置されていた。」「知の第一義的任務が、無言の頭文字符号をして語らせることだったからだ。」

○「十六世紀の知は、言表された場合にもひとつの秘密であり、ただ共有された秘密となるにすぎない。」

○十七世紀、十八世紀には、「学問とは言語による伝達の体系に属するものであり、言語は最初の一語からしてすでに認識である。」「語ること、あきらかにすること、知ることは、語の厳密な意味で《同じ秩序（二次元）》に属する。」

○「古典主義時代が学問によせた関心、学問上の論争の公開性、そのきわめて非宗教的な性格、その素人にたいする門戸開放…これらすべては、まぎれもなく社会学的現象以上のものではない。…それは、知の生成にわずかな変様をももたらしはしなかった。」

○「これらすべての現象の生じる条件、」それは「知と言語との相互依存関係のうちにある。」

○「十九世紀は、この依存関係を解消する。」「閉ざされた知」と「純粋な言語（文学）」を「対立するまま放置する。」

4)「言語が分析となり順序となったため、言語は、時間とのあいだに、それまではなかった関係を結びことになる。」(p114上)

◎時間は言語に内在する

○「十六世紀は、さまざまな言語が歴史のなかで継起し、たがいに他を生みだしうることを認めていた。」(ヘブライ語は、古典シリア語とアラビア語を誕生させたと考えていた。ラテン語の子孫は、イタリア語とスペイン語とフランス語とされていた。)

○(十七世紀)「言語が、それ自身の規定する継起関係の法則にしたがって、表象と語を時間のなかに展開する。」「それぞれの言語の特異性を規定するのは、この内的秩序と、その言語において語の占める場所であって、歴史的系列のなかで言語の占める位置ではない。」

○古典主義時代の人々は、言語の系列のかわりに「言語の類型学を考える。」それは「語順の類型学」である。

・「語順転換の自由な言語」＝「想像力と関心」の順序にしたがう。語の位置は一定しない。

・「類比的な言語」＝反省の画一的順序にしたがう。分析的順序づけのなかで語の占める位置だけが、機能上の価値をもつ。

○「諸言語は、継起関係のさまざまな可能なタイプを示す表のうえで結びつけられ区別される。そしてこの表は、同時的なものでありながら、どれがもっとも古い言語であったかを暗示するのだ。もっとも自然発生的な順序（心象と情念の順序）が、もっとも反省的な順序（論理の順序）に先行したにちがいないからである。」

○「外的な年代決定分析は分析と順序の内的形態によって律せられる。」時間は言語に内在するものとなった。

◎偶発的な諸言語の進化 (p115下)

○「諸言語の歴史そのもの」は、移住、戦争、交流などによる「風化、偶発事、遭遇」などにすぎない。

○こうした諸言語の進化は、「言語がそれ自体としてもつ歴史性の力によってではない。」それは発展のいかなる内的原理にもしたがわず、表象と諸要素とを展開するものなのだ。

○「言語にとって積極的な時間」は、「語の順序づけのうちに、すなわち、言説の空洞のうちに、求められ

なければならない。」

●一般文法の認識論的な場（まとめ）（p 116上）

○「一般文法はまったく比較文法ではない。」

○「一般文法が一般的であるのは、それが、文法的諸規則のしたに、しかもそれらの基礎をなすもののレベルにおいて、言説の表象的機能（「表象されているものを指示する垂直的機能」「言説と思考と同一の様態にもとづいて連結する水平的機能」）を示そうとするかぎりにおいてなのだ。」

○「一般文法は、すべての言語の法則を規定することではなく、個々の言語をそれぞれ思考のそれ自身にもとづく分節化の様態と見なして、それを順次扱うことを目指している。」

○一般文法は、「（各言語の表象の）自然発生的な特徴が利用している、同一性と相違性の体系を規定する」。それは「各言語における《分類法》（各言語において言説を生み出す可能性の基礎となっているもの）を確定する。」

●一般文法の二つの方向（p 106下）

1) 言説が自己の各部分を連結する仕方が、表象がみずからの各要素を連結する仕方と同様である以上、一般文法は、他の語との関係における語の表象機能を研究しなければならない。」

- ・「語と語を結びつける紐帯の分析（命題の理論、とりわけ動詞の理論）」
- ・「語の種類のタイプとそれら相互の区別」
- ・「表象の截断する仕方の分析（分節化の理論）」

が前提とされる

2) 言説がたんなる表象的総体ではなく、その表象するものがまた表象であるという二重化された表象である以上、一般文法は、語がその語るものを指示する仕方を研究しなければならない。

- ・「語の原初的価値（起源と語根の理論）」において
- ・「語がつねにもつ変位（位置が変わる）、意味拡張、再組織の能力（修辞的空間と転移の理論）」において研究しなければならない

三 動詞の理論（p 117上）

○「命題は言語に対して、表象が思考にたいするのと同じ関係にある。」

○「（命題は）言語のもっとも一般的な形式であり、…もっとも基本的な形式」である。（命題を分解すると、言説はなく、素材としての要素だけになる。）

○「言語が言語になるのは、語のうちにおいてではない。」

○語を語たらしめるのは、「語のなかに隠されている命題なのだ。」

○「命題こそ、音声記号を表現としての直接的価値から切り離し、それをその言語としての可能性のうちのみごとに位置づけるものにほかならない。」

○「古典主義時代の思考にとって、言語は、（表現ではなく）言説のあるところにはじめてあらわれる。」

○「言語のすべての機能が、命題を形成するのに不可欠なわずか三つの要素に還元される。すなわち、主辞、属辞、そして両者の紐帯（繫辞）である（ホプス）。しかも主辞と属辞とは同じ性格のもの」であり、「ある条件のもとでは、両者の機能を交換することができる。」

○「唯一の、だが決定的な相違は、動詞の還元不能な性格の示すそれである。」

○「動詞はあらゆる言説の不可欠の条件であり、それが（すくなくとも潜在的に）実在しないとことでは、言語があるということとはできない。」「言語の発端は、動詞の出現するところにある。」

○「（動詞は）他の語とおなじ規則にしばられ、他の語のように被制辞や一致の法則にしたがうありふれた

語であると同時に、他のすべての語よりも奥まったところ、語られた領域ではなく、人がそこから語るところの領域に位置している。」

○「(動詞は) 言説の外縁、語られたものとみずからを語るものとの縫い目、まさに記号が言語となりつつあるその場におかれている。」

●動詞の機能 (p 119上)

○「動詞は《肯定する》、すなわち、それは…言説が、たんに名詞のあらわす物を思い描いているばかりでなく、それに判断を加えている人間の言説であること (ポールロワイヤル論理学)」を示している。

○「二つの物のあいだに主辞＝属辞関係が肯定されるとき、つまり、AはBで〈ある〉というとき、そこに命題—そして言説—が生じる (コンディヤック)。」

○「ただひとつ《ある》という動詞だけが…その純粋性を保持している (ポールロワイヤル論理学)。 言語の本質はすべてこの独異な語のうちに集約される。

●一語の独異な力 (p 120上)

○「存在を指示する何らかの仕方がなければ、言語はない。けれども、言語がなければ、言語の一部にすぎない《ある》という動詞もない。」

○「この単純な一語は、存在が言語のなかに表象されたものである。だがそれはまた、言語の表象的存在—みずからの語っているものを肯定することを言語にたいして可能ならしめることによって、言語を真偽の判断を受けうるものにしていくところのもの—なのだ。」

○「記号によって示されるものの存在へ向って記号の体系をまたぎ越えるこの一語の独異な力により、言語は徹頭徹尾《言説》となるのにほかならない。」

●この力はどこからくるのか (p 120下)

○「《ポールロワイヤル》の文法家たちは、「《ある》という語の意味は肯定することだと述べた。…むしろ、観念を肯定することが、この動詞によって保証されているというべきだろう。」

○「動詞が肯定する唯一のものは、たとえば緑色と樹木、人間と実在または死といった、二つの表象の共存にほかならない (コンディヤック)。」

○「共存は物そのものの属性であり、表象の一形態にすぎない。」(すべての印象のなかで、(たとえば) 緑色と樹木とが結びついていると (わたしが) 語ることである)

○「すべての言語をその指示する表象に関連づけるのが、《ある》という動詞の本質的機能だということになろう。」「それが記号からあふれでて向う存在こそ、まさしく思考の存在にほかならない。」

○「動詞が指示するのは、結局のところ、言語の表象的性格、言語が思考のうちに場所を占めるという事実、記号の限界を越え、記号を真実のうちに基礎づける唯一の語も、けっして表象それ自体にしか到達しないという事実、にほかならない。」

○「語ること、それは、記号を用いて表象すると同時に、動詞によって支配される総合的形式を、記号にあたえることなのだ。」(動詞とは、主辞＝属辞関係の定立、すべての属辞のささえと形式である)

○「動詞の機能は、一般文法の統一的領域が消滅するやいなや、解体する以外にない。(そのとき)「動詞は他の語とおなじ資格のもの」となり、「言語の顕示力が、文法より古い自律的問題として再出現する。」

四 分節化 (p 122上)

○「《ある》という動詞は、「主辞＝属辞関係定立と肯定との二重のはたらきをもち、言説と語ることの第一義的で根源的な可能性との交点をなす。」」

○それは、「命題の、最初の、しかももっとも基本的な不変要素を規定する。」

○「命題のこうした純然たる下図は、どのようにしてべつべつの文にかわりうるのか？ 言説はどのようにして表象のすべての内容を言表できるのであろうか？」

○それは、「言説が、表象にあたえられたものを部分ごとに《名ざす》語からできているからだ。」

○「語は指示する。…その本性において語は名詞である。…それは、まだ他のいかなる表象でもなくあるひとつの表象に向けられている以上、固有名詞なのである。…（名詞は無限にひしめきあう）…名詞は名ざすべき物と同数だけなければならない。」（だがその場合、名詞はそれが指示する表象に完全に密着し、主辞＝属辞関係は定立せず、言語は言語以下となる）

○「名詞が文中で機能を持ち、主辞＝属辞関係の定立がおこなわれうるためには、二つの名詞のうち的一方（少なくとも属辞）が、多くの表象に共通な何らかの要素を指示しなければならない。」

○「存在の指示が命題の形式にとって必要であるように、名詞が一般性をもつことが言説の諸部分（一種種の品詞）にとっては必要なのだ。」

### ●分節化の二つの仕方（p 1 2 3 上）

1) 「たがいに何らかの同一性をもつ個体をまとめ、あい異なる個体を分離する、水平方向の分節化」

・この分節化は、しだいに大きくなる（そしてしだいに数を減ずる）群による漸次（ぜんじ）的一般化を形成する。

・「個体から種へ、種から属や綱へと、言語は一般性の漸次的増加に正確に則って分節化される。言語において、この分類上の機能をあきらかに示すのは実詞（じつし）」である。」（動物、四足獣、犬、ちじれ毛のスパニエル犬 のように）

2) 「垂直方向の分節化であるが、水平方向の分節化とつながりをもつ。…それ自体によって存立する物と、独立した状態ではけっして遭遇しえない物—修飾、特質、個有性、あるいは特徴—とを区別する。」（深層に実体があり、表層に品質があると考える）

・こうした切断は、言語のなかでは形容詞の存在によって明示される。

○「言語の分節化は、（《ある》という動詞を別にすれば）、直行する二本の軸、すなわち、個体から一般へと向う軸と実体から品質へ向う軸、に沿っておこなわれるわけだ。この両者の交点に普通名詞が、一方の軸の先端に固有名詞が、他方の軸の先端に形容詞が位置するのである。」

### ●第二の表象を組み合わせる力（p 1 2 4 上）

○（表象の）「二つのタイプが種々の語を区別するのに役立つのは、表象がこのおなじモデルにもとづいて分析される」かぎりのことにすぎない。

○「言語の分節化と表象のそれのあいだには、ずれの生じる余地がある。」

・「白さ」は品質を指示するが、実詞によって指示されている。

○ずれは、「言語が、みずからに付随するものとして、みずからの厚みのなかに、表象における諸関係と同一の関係をそなえていることを示すものにほかならない。」

○「言語は、表象の諸要素に、その表象を表象する以外に機能」を持たない。

○とはいえ「第一の表象とはべつのものである第二の表象を組みあわせる力をもつのではあるまいか？」

・言説が形容詞に文の内部で命題の実体としての価値をもたせれば、形容詞は実詞になる。文中で偶有性（実体の対立的な現象様態）としてはたらく名詞は、実体を指示しながら形容詞となる。

○「命題の要素相互の関係は、表象の要素相互の関係と同一である…命題はひとつの表象で《あり》、表象と同一の様式で分節化されている。」

○「表象を言説に変形するに際して、命題はそれをさまざまな仕方で分節化することができる。」

○「命題それ自体ひとつの表象であって、それがもうひとつの表象を分節化するわけだが、その際ある種の

ずれの生ずる可能性」が残されており、そのことが、言説に自由をあたえるとともに、諸言語のあいだの相違をもたらす」。

#### ●分節化の層（p 125上）

○「分節化の最初の層」において「すべては言説となることができる。」

○「名詞と名詞を結合するためのものとしては、《ある》という動詞とその主辞＝属辞関係定立機能」しかない。しかし、「表象の諸要素は複雑な諸関係（継起、従属、結果）の網目全体にしたがって分節化されている」。言語が表象的となるには、「それら諸関係を言語のなかにもちこまなければならない。」

○《付属的（ポールロワイヤルがそう呼んだ）》諸観念を指示する、あらゆる語、音節、文字が生まれてくる。前置詞や接続詞、同一性・一致の関係、依存・被制の関係を示す統辞上の記号が必要とされる。複数や性の記号、普通名詞とそれが指示する個体を関係づける語（具体化する語・抽象化する語（メルシュ）＝冠詞や指示詞）が必要とされる。

○これらの多くの微細な語は、「命題の形式の骨格が要求するような名詞単位（実名詞あるいは形容名詞（ポールロワイヤル））より下のレベルの分節化を構成する。」どれも、「孤立した状態では、限定された一定の表象内容をみずからのものとして保持していない。」

○「動詞と名詞が《絶対的に意味をもつ語》であるのにたいして、それらの語は相対的様態においてしか意味をもたない（ハリス）。「それらの所属する文法的総体によってしか価値をもたない」。「言語のなかで、表象的であると同時に文法的でもある複合的性格の新たな分節化をおこなうが、二つの次元の一方が正確に他方と重なりあってしまうわけではない。」

#### ●異端の分岐点（一般文法の選択）（p 126上）

○一般文法は、「名詞単位以下のところへ分析を押しすすめ、意味に先だつものとして、意味を組みたてている無意味な要素をあきらかにするか、逆行的にこの名詞単位を分解してより局限された尺度を認め、実後より小さいもの、すなわち、小辞、音節、さらに文字そのものにまで、表象的有効性を見いだすか」の選択をせまられる。

○二つの可能性は、「諸言語に関する理論が言説とその表象的価値の分析とをみずからの目的とする瞬間から呈示され、指定される。」この二つの可能性は、「十八世紀の文法を分つ《異端の分岐点》となる」。

#### ●機械としての言語（p 126下）

○「語の表象的価値が分解あるいは中断されると同時に、意味は消滅し、思考にもとづいて分節化されぬ素材、その結合関係を言説における結合関係に帰着させえぬ素材が、独立したものとして出現する。」

○（機械と）同様に「言語も、完成化されていくにしたがって、ある命題の意味を、それ自身表象的価値をもたぬが、命題を明確にし、その諸要素をつなぎあわせ、その場合における限定を指示する役割をもつ、文法的装置をとおして表現する。」（アダム・スミスの発想）

○統辞法の変化（ポールロワイヤルでは、構文や語順、命題の内的展開と同一視されたが、独立したものとされる（シカール））「それぞれの語にその固有の形態を規定する」のが統辞法とされ、「文法的なものの自律性が素描される。」

○世紀の末「命題の論理的分析と文の文法的分析とを区別する」（シカール等）

○「表象的価値が消散してしまう分節化の層に達するや…（人々は）もはや文法には補足しえぬところ、慣習と歴史の領域に移行してしまう。」

○十八世紀「統辞法は各民族の習慣が気まぐれに展開される恣意性の場と見なされていた。」（言説が文法の対象であるかぎり、こちらの分析は放置された。）

#### ●二本の道的一方（p 127上）

○「言語記号の分析全体を言説の内部に引きとめておくことを可能にしていた、ひとつの反省が展開されていく。」=>（微細な語、音節、屈折、文字のなかに隠されている）「晦冥な名詞的機能を探求した」。

・それらはすべて、名詞だった。身振りだった。

「あらゆる語を、忘れられた古い名詞がついにふたたびそこにすがたをあらわす音節要素に還元した」（ル・ベル）

・音節以下の文字の検討

「唇の接触はもっとも容易であり…人間が知る最初の存在…を指示するのに役立った。（クール・ド・ジェブラン）」

「歌うような母音は情念を堅い子音は欲求を表現した」（ルソー）

#### ●語と命名（p129上）

○「言語は、その厚み全体をつうじて…表象機能を保持している。その分節化ひとつひとつのなかで、言語は太古この方つねに《名ざし》てきた。言語はそれ自体において、もっとも複雑な表象の分析や合成さえも可能にするためにたがいにささえあっている。」

○「眠っている命名が、目に見えないが消すことのできなぬ表象の反映を音の仕切りのなかに閉じ込めている。」

・十九世紀の文献学にとって、この種の分析は死文だった。

・マラルメ、ルーセル、レーリス等において、語の謎が再びあえあわれたとき文学的なかたちをとった。死文だったわけではない。

○「語を破壊したとき見いだされるのが、…別の語であり、それらの語を粉碎すればさらにべつの語が解放されるという思想—それは、われわれが、言語のもっとも晦冥で、しかももっとも現実的な力をそこに転写している神話なのである。」

○「尽きることのないか価値が目のおよぶかぎり遠くまで言語の内部に浸透しているからこそ、文学の営為がおこなわれるあの果てしないつばやきのなかで語ることができる。」

○古典主義時代においては、関係は同一ではない。「二つの形象は正確に対応しあっていた。すなわち、言語が命題の一般的形式のうち完全に含まれるためには、それぞれの語が、その最小の単位にいたるまで細心の命名でなければならなかった。」

#### 五 指示作用（p130上）

##### ●結合と置換

○「もし言語の根本的機能が、名ざすこと」であれば、「言語は指示であって判断ではない」。「元初における命名と語の起源の原理」は、「判断の形式上の優越性」と均衡をたもつ。

○分節化で展開された言語の両端に、「主辞＝属辞関係定立という動詞的役割における存在」と「元初における指示という役割における起源」とがあるかのようだ。後者は「指示されたものを記号におきかえること」を、前者は「ある内容を結合すること」を可能にする。

○「表象を分析する能力とともに記号一般にあたえられた結合と置換の二つの機能が、対立しつつ相互に依存するかたちでふたたび見いだされる。」

##### ●言語の起源（p130下）

○言語の起源をあきらかにすることは、「言語が純然たる指示であった原初の瞬間を再発見すること」

○「言語の恣意性と同時に、言語とそれが名ざしているものとの深い関係を説明しなければならない」

・指示するものは、その示すものとことなることがある



・指示するために、特定の音節なり語なりがつねに選ばれる

○二つの説明はたがいに他を絶対的に必要とする。

・動作による言語の分析：指示されたものの記号による置換を説明する

・記号の指示作用の永続的な力を正当化する

●動作による言語（p 131上）

○自然が人間に許すのは、「さまざまな状況のなかで身振りをするにすぎない」。

○しかし「このような明白な動きは、われわれの諸器官の構造にしか左右されないため、普遍的であるという長所をもっている。…自身のものであれ、仲間のものであれ、同一性を認めるという可能性が生じる」。

○他人の叫びなどと自分自身の叫びなどに「同一の表象を結びつけることができるだろう」。(記号として)

○記号となった仕ぐさを用いて、観念や感覚、欲求、苦痛を「相手のうちに生じさせることができるだろう。」

「記号のこうした意図的用法とともに言語のような何ものかが生れかけるのだ。」(コンディヤック等)

○こうした分析は、動作による言語の発生過程を介して「言語と自然をつなぎあわせている。」しかし、それは「言語を自然に根づかせる」より「言語を自然から切り離す」ためであり、言語と叫びとの相違を指摘し、「言語の人為性を基礎づける」ためなのだ。

○言語となるには、「関係相互の類比に留意すること（他人の叫びと感じているものは、わたしの叫びと恐怖の関係に等しい）」、「時間を逆転して記号をそれが指示する表象より以前に故意に用いること（叫びをあげる激しい餓えの前に、餓えに結びつけられている叫びをあげる）」、「他人のうちにそれらの叫びや身振りに照応する表象を生じさせようと意図すること（餓えの感覚ではなく、記号とわたしの欲望との関係の表象）」という複雑な操作が必要。

○「言語は、表象が外に表出されるときではなく、表象が意図的に自己からある記号を分離し、その記号によって自己を表象させるときに生まれるのである。」

○「動作による言語は、その名にもかかわらず、言語を動作からへだてる記号の還元不能の網目を出現させるわけである。」

●約束による言語（p 132上）

○動作による言語は、「みずからの人為性を自然のうちに基礎づける」。動作による言語を構成する諸要素の大部分は、「その指示するものと内容上のいかなる同一性ももたず…同時もしくは継起の関係をもつにすぎない」。(叫びは恐怖に似ていない)「その指示するものの本性を表現しはしない。両者のあいだに類似はないからである。」

○「そこから出発して、人々は約束による言語を確立することができるであろう。」彼らは「物の標識となる記号をじゅうぶん持っているから、それらを分析し組みあわせる新たな記号を定めることができるのだ」。

○「言語は、人間が築きあげたものではなく、人間が受けとったものと想像すべきだ。(ルソー)」（なぜなら同意には、成立した言語が必要だからだ）

○しかし、動作による言語が、(必然性を裏づけ)「このような仮定を無用のものになっている」。

・人間は記号をつくるためのものを自然から受けとる。

・それらの記号は、他の人々との合意によって、残される記号、認めるべき価値、用い方の規則を選ぶのに役立つ。

・最初のもをモデルにして新たな記号を形成するのに役立つ。

・同意の最初の形態：音声記号を選びとること。第二の形態：まだ標識をもっていない表象を指示するために、それと隣接した表象を示す音に近い音を合成すること。

○こうして、「固有の意味での言語が、動作による言語の（すくなくとも）音声的部分の側面的延長をなす一連の類比関係によって構成されていく」。

○「固有の意味での言語は、動作による言語に類似しており、《まさにこの類似が理解を容易にする。この類似は類比関係と呼ばれる。…（この類比関係がいきあたりばったりの選び方を許さない）（コンディヤック）》」

●動作による言語からの発生過程（p 133上）

○「動作による言語からの言語の発生過程は、自然の模倣か恣意的な約束事かのいう二者択一ではまったくとらえられない。」

○「最初の段階では、人為の介入する余地はあるが、（自然の身体的な）素材はすべての人間に同様な仕方で課せられたものであり、第二の段階では、恣意性が排除されるが、分析にたいして開かれる道は、すべての人間、すべての国民において正確に重なりあうものではない。」

○「自然の法則とは、語と物の相違（言語と、そのしたにあって言語に指示されているものをわかつ縦の分割）であり、約束ごとの規則とは、語と語の類似、語をたがいに他の語から形成しそれらを無限に繁殖させる、巨大な横の網目である。」

●語根の理論（p 133下）

○語根の理論は、動作による言語の分析とすこしも矛盾しない。むしろその分析の内部に正確に位置をしめる。語根とは、「多数の言語に見いだされる同一の基本語である。」

○語根は「意思の介入する余地のない叫びとして自然から強制され、動作による言語から約束による言語のなかに取りいれられたのである。」

○「もしすべての国民が、あらゆる風土において、動作による言語の提供する材料のなかからこれらの基本的音声を選びだしたとすれば、それは、彼らがそれらの音声のうちに、指示する対象との類似、あるいは類比的対象への適用可能性を、二次的かつ反省的な仕方で発見したからにちがいない。」（語根は、言語を言語として整えた約束ごとによって、はじめて言語記号としての価値をもつ）

○「記号が表象の内部にありながらその指示するものの本性に合致し、すべての言語が原初の語の財宝を一樣に受けいれたのは、まさにこのようにしてなのである。」

●語根の形成（p 134上）

○「語根はいくつかの仕方で形成される。」

- ・擬音：「名ざそうとする対象の発するのと同じ音を自分の声で作り出すこと（ド・ブロス）」
- ・感覚相互のあいだに感じられる類似を利用する：赤い色は聴覚に同様の印象をあたえる R の音でよく表現される（コピノー）
- ・意味しようとするものに似た運動を発声器官におこなわせる：自然な運動から結果する音が、対象の名となる。たとえば喉は摩擦音。
- ・器官を指示するのに、それが発する音を利用する：歯 dents は d と t。

○「類似関係を約束ごとにより音であらわすことで」言語は「原初的語根の一体系をもつようになるわけだ」。しかしそれは「限られた体系」である。それらの語根は一音節からなり、その数は少ない。

○語根が（設定する類似関係のために）「大部分の言語で共通であることを考えれば、この体系はさらに限られたものとなるだろう」。しかし、「それぞれの言語がその特殊性において形成されるのは、まさにこれらの語根から出発してである」。「ついにはまことの森を作り出す（ブロス）」

●言語の系図（p 134下）

○「言語はいまやその系図のなかで展開することができる。」

- ・空間の上方には、ヨーロッパと東方の言語の少数の語根が記入される。
- ・垂直方向には各語根の完全な系譜
- ・原初の語根から遠ざかれば、横の線で規定される言語はより複雑で、新しいものとなる。(語は表象の分析に際してより有効で精緻なものとなる)

○「歴史的空間と思考の碁盤目は、こうして正確に重なりあうにちがいない。」

●分析の空間としての言語 (p 134下)

○語根の探求は、この時代が放置した「歴史と母語の理論への回帰のように見えるかもしれない」。しかし、語根の分析は、「言語をその誕生と変化のなかに再び位置づけるものではない」。それは、「歴史というものを、表象と語との同時的截断をつぎつぎにたどることに還元してしまう」。

○「古典主義時代において、言語は、ある時点において思考や反省の一定の様態を可能にする歴史の断片ではない。それは分析のための空間であって、この空間のなかで、人間の時間と知が巡歴の行路を展開する。」

○「言語は語根の理論によって歴史的存在となったのではないという証拠」は、導きの糸となっていたのが、「語の外見上の変化の研究ではなく、意味の恒常性だった」ことである。

○語根を決定することがすなわち語源学であり、この技術の規則は厳密に規定されていた。

○「その歴史の全般にわたって語根の連続性を保証する、消えることのない唯一の恒常的要素は、意味の同一性、すなわち、際限なく存続する表象上の領界にほかならない。」

六 転移 (p 136上)

○「語が根源の本質において名詞すなわち指示名称であり、またそれが表象そのものとおなじ様態で分節化されているとすれば、語はなぜ抗いがたい力で起源における意味から遠ざかり、隣接した意味、より広い意味、もしくはより狭い意味を獲得することができるのか？」

○「語根の変容には規則がない。その原因は外部にある。」(発音の容易さ、習慣、風土など)

○「意味の変化は、いくつかの原理にもとづいている。」

●文字表記 (p 137上)

○「文字表記には、語の意味をあらわすものと、音を分析して復元するものとの、二つのタイプが知られている。」

○「語の意味を図式的に表象することは、起源においては、語の指示する物を正確に描くことである。」

○「まことの文字表記がはじまるのは、人々が、物それ自体ではなく、それを構成する要素のひとつ、物がしばしばおかれる状況のひとつ、あるいはまたその物に類似した何か別のものを、表象しはじめるときにほかならない。」

○「ここには修辞学における三つの比喩形象、提喩、換喩、濫喩がみられる。そして、象徴的な文字表記で裏打ちあれたこれらの言語が発展しうるのは、まさにこれらの比喩形象が規定する脈網に沿ってなのだ。」

○「言語はしだいに詩的な力をおび、最初の命名がながい隠喩の出発点となる。」

●象形文字を持つ言語と歴史 (p 138上)

○「象形文字をもつ言語の歴史はまもなく停止する。そこにはほとんど進歩の余地がないからだ。」

・知識を得るには、…語、ついで語の発音とは無関係な符号という、二つのものを習得しなければならない。

○「東方と西欧との本質的相違は、まさに空間と言語のこの関係のうちに位置している (ヴォルネ)」

●アルファベット文字をもつ言語 (p 138下)

○「アルファベットの文字をもつ場合、人類の歴史は一変する。人々は観念ではなく音を空間に書きうつすのであって、種々の音から共通の要素を抽出し、組みあわせれば可能なかぎりすべての音節と語が形成され

るような、少数のきまった記号をつくりだすのだ。」

○「アルファベット文字は、表象の図示を断念することにより、理性そのものにとって有効な規則を音の分析に移入する。」

○「言語の内部に、分析と空間が合致する語のあの折り目自体のなかに、進歩の最初の、だが無限の可能性が生じる。」

○十八世紀の進歩というものは、根源において、「歴史の内部におけるひとつの運動ではなく、空間と言語との基本的な関係なのだ。」

○「言語は時間のたえざる断絶に空間の連続性をあたえる。そして、言語が時間をとおして物の認識を連続させる能力を持つのは、まさにそれが表象を分析し、分節化し、截断するからにほかならない。」

○「言語とともに、空間の雑然たる単調性が区分され、他方、継起的事象の多様性が統一されるのだ。」

#### ●最初の動き（p 139下）

○文字表記は、分析をささえ監視する。しかし分析の原理ではないし、最初の動きではない。

○「最初の動きは、注意力、記号、語に共通したある種の変位である。」

○「精神は、ある表象のなかで、表象の部分をなす要素、表象に付随する状況、表象が思い出させる他の類似した—ただしそこにはない—物、そうしたものに着目して、それを言語記号をあたえることができる。（コンディヤック）」

○（複数の物に）「ただひとつの名をあたえる漸次的分析と言語のより進んだ分節化は、修辞学でよく知られる比喩形象にもとづいておこなわれた。…このことは、これらの比喩形象が、まったく文体上の凝った技巧の結果ではないことを示している。…それらは、あらゆる自然発生的な言語に固有の可能性をあらわすものだ。」

#### ●修辞的空間（p 140下）

○「言語の奥底には語の修辞的空間が見いだされる。」

○諸言語が、多様性を持ち、固有の歴史、流行、習慣、忘却をもつのは、「語が《時間》のなかにではなく、それが本来の座を見だし、転位し、屈曲し、ゆっくりと一本の曲線くりひろげることのできる《空間》、すなわち《譬喩（ひゆ）のはたらく》空間のなかに《場》をもつからにほかならない。」

○「命題は、修辞法によって視覚に訴えるものとなった比喩形象を継起的なかたちに展開し、それを理解させる。」

○「譬喩のはたらくこの空間がなければ、言語が主辞＝属辞関係定立を可能にするあらゆる普通名詞から形成されることはあるまい。逆に、語によるこうした分析がなければ、比喩形象は無言のまま瞬時の存在をもつにすぎず、白熱した一瞬に知覚されるや、ただちに時間さえない闇に没してしまっただにちがいない。」

○「命題の理論から転移の理論まで、言語に関する古典主義時代の反省のすべて—「一般文法」と呼ばれたもののすべて—は、《言語は分析する》というこの単純な一句の細密な註釈にほかならない。」

・《言語は語る》ものだと信じてきた西欧の言語経験のすべては、十七世紀になって、急転回した。

### 七 言語の四辺形（p 142上）

#### ●対立関係

○「四つの理論—命題の理論、分節化の理論、指示作用の理論、転移の理論—は、いわば四辺形の四つの線分を形成する。それらは二つずつ対立し、二つずつささえあっているのだ。」

・（命題の形式を満たしつつ）分節化（分離）は、命題（結合）と対立。

・指示作用（分節化された名詞的なものの接合）は、分節化と対立。

- ・転移（語の連続的運動）は、指示作用（表象と語根の安定した関係）と対立
- ・転移がなければ、命題は一般性を獲得できない。だが転移は空間的、命題は継起的。

●対角線的な関係（p 1 4 2 下）

○「四角形のあいたいする頂点にも、いわば対角線的な関係がある」

・分節化と転移の関係：分節化された言語ができるのは、語がたえず転移をつづけ、さまざまな意味の広がりを獲得してきたから。言語の分節化の能力は、それが到達した転移の程度によって指定される。

・命題から指示作用（起源）への関係：判断するという行為の肯定作用から、名指すという行為の指示作用へと向う。語は表象の存在以外を決して語らないが、表象されたものをつねに名ざす（語と表象するものとの関係の確立）。

・最初の対角線：特殊性を規定する言語の能力をあらわす。（合成と分解の能力とによって語は要素として機能）

第二の対角線：言語と表象との際限のないからみあい（言語記号をして表象を表象する二重化）をしめす。（表象能力によって語は代替物として機能）

分節化	命題
	X
指示作用	転移

●二本の対角線の交点（p 1 4 3 上）

○四角形の中心：表象の二重化が分析としてあらわれ、代替物が分離の能力をおびるところ。表象の一般的分類法の可能性と原理が宿る。そこに《名》（名詞）がある。

○表象が命題のなかにあらわされうるのはまさに《名》によるから、「言語のすべての機能はこの存在のなかで交叉する」。また、この存在によって、「言語は認識と同じ様態で分節化される」。

○すべての名が正確であり、言語がよくできていれば、真である判断も困難ではない（代数計算のように）。実際には、正当でない分析や抽象や組みあわせに名があたえられている。しかし、「語を思考するときには、それが表象しているものの可能性を肯定しないわけにはいかない。だからこそ名は、（中央にあって）言語のすべての構造が収斂する点であると同時に（純然たる内面的結果）、そこから出発していっさいの言語が、その審判者となるであろう真実と関係をもつことができる、そのような点であるとも見えるのだ」。

●古典主義時代の言語経験（p 1 4 3 下）

○書くなり語るなりすることは、「物と語とが物に名をあたえることを可能にする共通の本質のなかで結ばれる場所まで、言語をつうじて赴くことなのだ。」（ひとたび名が言表されると、そこまで導いてきた言語はこの名のうちに解消する）

○「古典主義時代の言説は、その深い本質においてつねにこうした極限へと向いながら、まさにその極限を後退させることによってのみ存立している。」

○「言説の横ぎっていくさまざまな比喩形象は、最後の瞬間にやってきてそれらを満たすと同時に廃滅させてしまう名が、すぐにはやってこないようにしている。名は言説の《おわり》なのである。古典主義時代の文学全体は、この空間に宿っている。」

○『クレプの奥方』から『ジュリエット』まで、「言語体験を押し流していったのは、まさにこの運動にほかならない」。

●生のままの言語（p 1 4 4 下）

○「古典主義時代の文学全体は、名の比喩形象から名それ自体へと向う運動のなかに宿っている。」  
・文学は、「はじめ、おなじものをさらに新たな比喩形象によって名ざすという任務を帯びていた」。  
・「やがて、それまでけっして名ざされたことのないもの、あるいははらかな語の襲のなかに眠っていたものを、ついに正当な語によって名ざすという任務をおびるにいたるのだ。」

○「ロマン主義はやがて、物をその名によって名ざすことを知った(?)が、ゆえに前代と絶縁したと信じるだろう（実際には、古典主義のすべてが、そこに向っている）。しかし、まさにそのことによって、名は言語の報酬であることをやめ、その謎めいた素材へと変化するのだ。」（サドの作品の本源のつづき）

・それ自体のために発音された名のこの暴力によって、言語は物としての兇暴な姿をあらわにするのだ。  
・名前以外の品詞も自律性をおび、名詞の至上権を脱し、名詞のまわりで装飾としての付属的輪舞をやめる。  
○「直接に言いあらわさぬものを表示させることのうちにはもはや特異な美がない以上、ここに、言語をその生のままの存在において顕示する役割をもった、言説的でない言説が生まれるであろう。やがて十九世紀が「言葉」と呼ぶことになるものである。言語のこの存在を保持し、それをそれ自体のために解き放つ言説こそ、文学にほかならない。」

#### ●外縁としての類似（p 145下）

○古典主義時代の四つの線分の分析。「問題は、いかなる条件において言語が知の対象となりえたか、この認識論的領域がいかなる境界のあいだに広がっていたかを、決定することであった。…何から出発して言語に関するしかしかの所説が可能だったのかを規定することであった。」

○四辺形は、「内部関係の図式というより外周を描くものであり、言語が「外部にある不可欠なもの」とどう絡みあっているかを示している。」

・命題なくして言語はない。「ある」という動詞と、主辞＝属辞関係が現存しなければ、言語ではなく、他の記号と同様な記号にすぎない。

・命題の形式は、同一もしくは相違の関係の肯定を、言語の条件として措定する。

この関係が可能であるかぎりにおいてしか語ることはできない。

・他の三つの理論的線分は、まったく異なる要請を含む。

・語の起源から出発して転移が起こり、ある語根がその意味と起源においてすでに結合し、さらに表象の分節化された截断が生じるためには、すでもっとも直接的な経験において、最初からあたえられている類似（物同士の類比関係のつづき）がなければならないのである。

・言語が実在するのは、同一性と相違性の背後に、自然の連続性、類似、反復、交錯という基盤があるからなのだ。

○「十七世紀初頭以来知の領域から追放された類似は、依然として言語の外縁を構成している。…それは、分析し、秩序づけ、認識することのできるものの領域をとりかこむ、環状の地域をなすのである。それなしには、言説が語ることのできぬ、そうしたつづきにほかならない。」

#### ●哲学と学問（p 146下）

○「言語とは、分節化された指示作用の仕組みによって、類似を命題的關係のなかにおさめるものである。《ある》という動詞を基礎とし《名》の綱目によって顕示される、同一性と相違性の体系のなかにおさめるのだ。」

○「古典主義時代における「言説」の基本的任務は、《物に名を付与し、この名において物の存在を名ざす》ことである。」

○「世紀にわたって西欧の言説は存在論の場であった。つまりそれは、表象一般の存在を名ざすとき、哲学、すなわち認識の理論および観念の分析であり、表象された個々の物に適切な名を付与し、表象の場全域にわ

たって「よくできた言語」の網目を張りめぐらすとき、学問—すなわち名称体系と分類法—だったわけだ。」